

街並み景観を良いものにする指標

柴崎 円

筆者は、文献調査により建築学者らのいう‘よい街並み’についてまとめ、実際の街並みにその法則があてはまるかどうかについて新宿・吉祥寺・池袋を対象地域としてアンケート調査をした。この結果により多くの人に好まれる街並みはどんなものなのか、また街並みのなかのどのような要素が街並みをよいものになっているのかを調べた。

建築学者らのいう、街並みをよいものにする要素は、スカイライン、壁面線の見え方、道幅と建物の高さとの関係、建物の幅と道幅との関係、ビスタと主にまとめることができる。これらとアンケート結果を比較すると以下ようになる。

スカイラインは整っているほうがよいとされるが、実際は整っていないほうがよい印象の街並みとなっている。壁面線はできるだけ見えたほうが

よく、看板も建物の壁面線に取り込むとよいとされるが、突出していてもあまり悪い印象を与えないという結果が出た。道幅と建物の高さの比率は1以下でも以上でもあまり影響を与えないが、4以上になると、建築学者らがいうように開放感を感じさせる。建物の幅と道幅との関係は、建物の幅の方が小さいと街並みが生き生きするとされるが、むしろ建物の幅が大きいほうが街並みを活気のあるものに見せている。ビスタがあると街並みが個性的になるとされるが、実際に統一感が生まれ、街並みをすっきりとさせている。以上のように、スカイライン・壁面線の見え方・建物の幅と道幅との関係は街並み景観にあまり影響がなく、道幅と建物の高さとの関係・ビスタは街並み景観に影響をもつ、ということがわかった。

伊豆大島における漁民の風の名前

高橋 麻実

海難を避ける必要のある漁業従事者にとって、風は重要な関心事である。彼らは風を概括的に認識するのではなく、風向・強弱・季節などの特徴により細分化して認識し、特定のアイデンティティを持つものとして、それらを固有の名前で呼んできた。本論では漁民が使用する風の地方名を伊豆大島での事例について取り上げ、気象庁大島測候所での風の観測データと漁業センサスのデータの分析、漁民への聞き取り調査、文献調査により、風の名前の認知度と使用法の変遷について考察した。

文献調査と大島北部の泉津・岡田、西部の元町、南部の波浮港の各漁協で行った聞き取り調査の結果によると、風の名前の変遷には以下の傾向があった。

①風の名前は、風向以外に、吹く季節や強さなど

の特徴をもったものから、風向のみを表すものになっている。

②港口から吹き込んでくる風の名前は、どの地域でも比較的よく残っている。あるいは、従来記録されていなかったものが新しく確認された。具体例は、岡田・泉津のナライ、元町のウワテ、波浮港のイナサである。

③風速が小さく危険度の低い風の名前は、使われなくなる傾向にある。

固有の風の名前と大島で実際に吹いている風との対応が、文献・聞き取り調査と風の観測データにより確認された。しかし、その風の名前も、漁民の意識変化と、それをもたらしした社会の変化（漁業の変化、テレビの普及、天気予報の精度向上など）によって、変化または消滅をし、細分化されたものから統合されつつある。